
泡沫の王女

シキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡沫の王女

【Nコード】

N 6 6 8 4 P

【作者名】

シキ

【あらすじ】

とある国の王城で、今日も王は執務に励んでいたが……。というのは最初だけで、マリアとリアンが織り成す剣と魔法の異世界ファンタジー。二人は人攫いにあつたにも関わらず、大事なものは命よりもベツトだった!?

0・プロローグ

ここは、とある国の王城。

「国王様~~~~!!大変です~~~~!!!!大変です~~~~!!」

豪華な部屋の執務机に座っていた国王は、いきなり開かれたドアへと顔を向けた。

「ん？そなたは・・・確か王女付きの侍女ではないか。こんな朝早くにどうしたのじゃ？」

開かれた扉の前には、顔を真っ赤にして息を乱した20代半ばの女性。

この城の侍女の制服である黒いワンピースに白いエプロンを着け、ここまで走ってきたのか肩を激しく上下させていた。

頭の上でお団子にしている黒髪が乱れているが、気にした様子もない。

「国王様、大変な事が!!!」

その様子に王の後ろにいた近衛の兵士が侍女に向かって一歩近づいたが、興奮した彼女の目には入らないようだ。

王は近衛兵に軽く片手をあげ、後ろに下がるように合図し侍女に訊ねた。

「何が大変なのだ。いつてみよ。」

「それが大変なのです!どうすればよいのでしょうか!」

王は訝しげに太い眉をしかめると焦った様子もなく、ゆっくりと豊かな腹の上で指を組んで侍女を見上げた。

「だから、何が大変なのだ？」

「ですから姫様が大変なのです！早くお探ししないと・・・」

これでは埒が明かない。

今まで様子を伺っていた近衛兵が王に許可をとり、侍女に近づいた。彼は落着かせるように彼女の肩に手をのせると、ぽんぽんとその肩を軽く2、3度叩く。

「侍女殿、とりあえず落ち着いてください。」

「も、申し訳ありません。あのっ、あまりの出来事に取り乱してしまいました。実は、実は・・・この手紙が姫様の部屋に置かれていたのです。」

侍女は、震える手で1枚の用紙を王に手渡した。
くしゃくしゃになった紙を受け取った王は、すばやく内容を確認した後、溜息を1つ。

「なんという事じゃ。娘が・・・」

持っていた紙を机の上に置くと、一度目をつぶって侍女に再び目を向ける。

「他に何か手掛かりは残ってないのか？」

「はい。わたくしが朝の準備をしようと姫様の部屋に入室した時には、もう誰も部屋の中にはおりませんでした。

姫様の机の上に、この手紙が置いてあっただけなのです。来月には隣国アルデイストの王子との婚姻の儀があります。早く搜索隊を出して見つけ出さなくてははいけないと思ひまして……。」

2人の様子を静かに見ていた近衛兵が、王に言った。

「姫様が、どうなされたのですか？まさか何者かに攫われたのですか？」

しかし、質問に答える声はなかった。

王は、ふうつと息を吐き出すと頭を机にゴンツと打ち付け、そのまま机に突っ伏した。

茶色い頭髮の中央が奇麗に禿げていたが、この緊張を孕んだ空気の中では気にするものもない。

なにやら王からは、外交が、婚儀が、などと、ぶつぶつと聞こえてくる。

心配になった近衛兵が、そろそろと王に近づこうとして廊下から聞こえてきた複数の足音に動きを止めた。

開かれたままのドアに目を向けると、この国の王子と二人の女性が部屋に入ってくるところだった。

ゆつたりとした青の服を身につけ、金糸の様な髪をサラサラと揺らしながら王子が王の前まで歩いてくる。

「父上！ディアナが居なくなつたとは本当なのですか！？」

普段は涼しげな瞳と称され知性を感じさせる顔立ちだが、今は興奮しているのか瞳が刺すように鋭くなっている。

そのあとから入室した2人の女性は、執務机の前に置かれている

ソファアーに腰をおろした。

一人はピンクのドレス、もう一人は青いドレスを纏っており、年齢はどちらも30代後半であろう。

ピンクのドレスを着た女性は、王子と同じ金色の髪と青い瞳を持ち、いくらか顔を青くして震えている。

彼女は王子の母であり、渦中の人である王女の母でもあった。この国の王妃である。

その女性を支えるようにして隣に寄り添った青いドレスの女性は、王と同じ茶色の髪をしていた。ただ王と違って豊かな量の茶髪をウエーブさせていたが・・・。

茶色の髪をウエーブさせた女性は臣下の嫁いだ王の妹、ティオナである。

「お兄様、実は私の娘のセレナも朝から見当たりませんの。」

それで御相談しに王城まで参りましたのに、ディアナ様までいらっやらないなんて

ディアナ様とセレナは毎朝、剣の練習を行うのが日課でしたわ。

もしかすると、鍛錬中にセレナも一緒に攫われたのではありませんの？」

しかし、何やらブツブツと呟いている王からは返事がない。

その様子に王子は痺れを切らしたのか、机の上においてあったくしゃくしゃの紙を見つけると読み上げた。

「父上、母上、兄上様。ディアナはセレナと一緒に旅に出ようと思います。」

来月に控えた婚儀ですが、先方との条件が合わないため破棄していただきたいと思います。

相手は大国で父上は肩身の狭い思いをしたいと思います、我がリアヌス国のためと思ってください。

正直に申し上げますと、あんな変態と結婚したくありません。アルディストの王子は私を視線で殺すつもりなのでしょうか。あんな国に嫁いでは命の保障はありませんよ。

もちろん、私ではなく相手の王子の命の保証です。

いくら正当防衛といえども王子を殺すなど死罪でしょうからね。なので結婚する前に逃げます。

私だって未来について考えてるのですよ。ふふふ。

この際、我がリアヌス国には私に勝てる剣士もいないので、セレナと修行の旅に出る事にしました。

まあ、可愛い子には旅をさせろというし絶世の美女である私には旅をさせてください

あ、許可はいりません。勝手に出かけますので。

それでは、また会う日まで。最後に常套句ですが使ってみたかったので一言そえておきます。

色々と疲れたので家出します。探さないでください。ディアナ!!
マリアンヌ!! リアヌ

代筆 セレナ!! ロベルト」

王子が手紙を読み上げ終わると、王と手紙を運んできた侍女以外の全員の動きが止まった。

さっきまで震えていた王妃の震えも止まっている。そして、明るい声で笑ったのだった。

「あらあら、まあまあ。ディアナったら元気いっぱいなんだから。うふふ。」

母の声で我を取り戻した王子は、未だ机につっぱしている王を憐れみの目でみやった。

この事態に掛ける言葉が見つからない。相手国になんて言ったらいい

いものか。

そんな事を考えていると、王がバンツツと机に荒々しく両手を叩きつけた。

「逃げたいのは、わしの方じゃー！ー！！」

この時期に家出など何を考えとるんじゃ！あんの、じゃじゃ馬がー！ー！ー！！

はぁ・・・それに・・・。

すまんのう。ティオナ。おぬしの娘のセレナを巻き込んでしまったようじゃ。

ディアナもティーナも剣の腕前と魔法の才があるばかりに家出などしたのじゃろう。

こんなことなら、護身のためなどに剣など学ばせなければよかったの。」

「・・・お兄様、よく見てください。手紙を書いたのはセレナのようです。

結婚に悩む姫をそそのかしたのは、うちの子ですわ。

あの子は昔から、やりたい放題でしたもの。

それに、あの子たちは強いですから二人のことは心配してませんわ。

心配しているのは婚儀のことです。どうしますの？」

ティオナの問いかけに、一同の表情が曇る。

本当に、とんでもないことをしてくれたものである。

どんよりとした空気の中、うふふつと笑い声が部屋に響いた。

その方向に、一同が顔を向ければ王妃の笑顔が。

「ディアナが嫌がるなら破棄いたしましょう。

女の子は好きな人と結ばれるべきですもの。

相手のアルディスト国には、お断りの手紙を。」

「しかしですね、母上。

相手は我が国とは比べることもできない大国ですよ。断ったりしたら何をされるか。」

王子の声に、うんうんと王が頷く。じゃあ、こうしたらどうかしらと王妃が両手を打ちならした。

「ディアナは、剣の練習で公務を投げ出したことも少なくないし、外では相当な猫かぶりでしたわ。

儚い姫君というのが国民の方々の印象でしょう？

ですから体調を崩し起き上がれなくなったことにするの。

あ！不治の病っていうのもいいかもしれないですわね。

いつ死ぬかも分からない子を王妃にするわけにもいかないもの。お断りする立派な理由になりますわ。」

ね、良い考えでしょ？と微笑む王妃に、その場の誰も答えることはできなかった。

0 プロローグ（後書き）

はじめまして。今回、処女作となる泡沫の王女を投稿させて頂きましたシキです。

どうぞよろしくお願い致します。

1・睡眠は大切

夜も深まった時間。

この一室では、今日何度めかの問答が繰り返されていた。

「ねえねえ、マリアそろそろ起きてよ。」

そう言ったのは、目深に灰色のマントを被った線の細い人物。

茶髪の女性が寝ているベットの横に立ち、女性をのぞき込んでいる。

「もうっ！マリアってば！！」

ベットに横になっている女性は、自分の名前が呼ばれているのにも関わらずピクリとも反応しない。

先ほどから何度も何度も起こしているのに反応がない女性を見て、名を呼ぶ方からは、はあっと溜息がもれた。

なんで起きないんだよつと言いながら、ベットに広がる綺麗な茶色の髪を軽く引っ張ってみることにしたようだ。

「マリアー、いい加減に起きて！ねえ、ねえ、」

「・・・・・・・・。」

くいつ、くいつ、っと髪を引っ張るも反応なし。

そのうち、髪を引っ張る力は段々と強くなっていく。

「ねえねえ、起きてー起きてー！マリアー！・・・・・・・・あっ！」

寝ている女性の首が、がくつとこっち側に引っ張られた。

途端、女性の目がカツと見開き、髪色と同じ茶色い瞳が相手を射ぬく。

「・・・何を、やってるんですの？」

言われた方は、その見下げたような瞳にビクッと体を震わせる。

「なかなかマリアが起きないから・・・さ」

「わたくしの眠りを妨げる権利がリアンにあるのかしら？ だいたい今、何時だと思ってますの？」

リアンと呼ばれた彼は、時間とともに増すマリアの威圧感に堪え切れず、はははと苦笑した。

「確かに、夜だけどさ・・・現状を見て欲しいなーっとか」

そう言い、あたりを見渡すリアンの視線を追って、マリアもあたりを見渡す。

木でできた部屋は、窓ひとつない。

天井にはランタンがかけられ、薄暗い中オレンジ色の光が揺ら揺らとゆれて不気味さを増していた。

部屋の中には4台のベットが設置され、2台には小さな子供が体を縮めて5人ずつ眠っている。他の1台は、マリアが占領しており、もう1台には2人の女性が横になっていた。ベットに入りきらない人々は、床に座って肩を寄せ合っていたり、壁に寄り掛かって眠っていたりと様々で、部屋の中には、おおよそ女性と子供で30人ほどの人々がいる。

どの人を見ても、例外なく服は着古されて、ところどころ汚れていた。

部屋の中を一周見渡したマリアは、ゆっくりとリアンに向き直った。

「それで？」

え？つとリアンは目を見張る。

「それで？つて、この状況が分からないの？え？」

鋭い目つきでみってくるマリアに、リアンは恐る恐る声をかけた。

「あの・・・その・・・もしかして本気で分かってない？」

僕たち、人身売買の組織に捕まってるんだけど・・・あれ？知らなかった？」

「なんですつて？人身売買の組織に捕まっていますつて？」

「あれ？マリア本当に知らなかったの？」

てつきり、僕は気づいてるのかと思つてたから・・・。

あのね、落ち着いて聞いてね。

僕たちは人売り達に攫われて、ここに連れてこられたんだ。

ここは、彼らのアジトなんだよ。

この部屋に一緒にいる人たちと逃げ出さないと何処かの変態おやじに売られてしまうんだ。」

そうと決まったら、さっそく脱出の準備をしようと右手を差し出したリアン。

そして彼は背中につたい汗を流した。鬼の形相と化したマリアの表情を見て・・・。

「リアン、あなた・・・そんな事で、わたくしを起こしましたの？」

2・睡眠は大切

「え？そんなことって？」

リアンは疑問に思いつつ、マリアを刺激しないように恐る恐る会話を続けた。

「そんなことって・・・何が？」

「そんな事とは、そんな事ですわ。わたくし人売りに捕まってたとぐらい知っておりましたけど？」

「え？知ってたなら、なんで寝てるの？普通、逃げようとしない？」

そういったとたん、相手からのプレッシャーが膨れ上がった。

「逃げる？ここから？ここは、屋根もあるしベットもありますわ。泊まるには最適な場所です。」

いや、それは分かるが・・・え？分かっていいのか？

リアンは段々、マリアに影響されながらも、いや、自分は正しいと頑張った。

「逃げてから、ちゃんとした宿に泊まった方がいいんじゃないかな？ここだと何されるか分からないし、ね？」

「宿？リアン、今あなた宿って言いました？」

その問いかけに、え、言っただけど？とリアンは言えなかった。

なぜなら、マリアの腰まである長い髪が浮きあがった気がしたから。効果音を付けるのなら、ふわっとではなく、ぶあつと。

「宿に泊まる、確かにそれは理想ですわね。」

ところで、リアン？あなた財布は見つかりまして？私たちの全財産が入った財布ですわ。

宿に泊まると言うからには、ちゃんと持っていますわよね？」

そう言っただけで、上手に口元だけでにこりと笑った。リアンの背中に汗がたまった。そう、冷たい汗が・・・。

「まさかマリア。今日、宿に泊まるお金がないから、わざと捕まっただの？」

ありえる。この女の性格なら、考えられる。

今日、リアンは草原を浮き浮き気分で歩いていた。

前に訪れていた町で大きな依頼を受け、成功報酬をもらっていたため、懐が温かかったからだ。

これで久しぶりに宿代だけじゃなく贅沢な食べ物も食べられると思っていたが、いつも以上に財布が重かったためか、気づいた時には財布が消えていたのだ。しまっていたはずのズボンのポケットから・・・。

それを聞いたマリアがどうなったかなんて思い出したくもない。

魔法で消し炭にされるかと思った。いや、される所だった。あのネズミ顔の男たちが現れるまでは。

そう人売りと呼ばれる人身売買を行う組織の男たちが現れるまでは。

「リアンに言いたい事があるんですけど、私が入りこむときに捕まえると思って？」

野宿よりも快眠を得られるかどうか確認しに大人しく付いてきたに決まっておりますわ。

わたくし、てっきりあなたもそうなのかと思ってましたけど？」

「僕は、人売りが現れた時に気絶しちゃったから・・・この部屋で起きたときに攫われた事に気づいたんだけど。」

財布を落としてから、人売りに会うまでのことを思い出しながらおずおずと答えるリアンに、ベッドの上のマリアは驚いた様に見開いた。

「まあ、リアン！あなた随分おとなしいと思ってましたけど気絶させられていたの？」

淑女のわたくしには丁寧な扱いをして下さっていたのに。

温かいベットと部屋を提供するからとエスコートして頂いたのよ。

ー

まあ、美しい私には当然のことよねっと、うんうん頷いてるマリアの顔は確かに美しい。

顔は綺麗な卵型で色も白く、羨ましいほどに小さい。

キリッとした眉と少し吊り上った驚色の瞳を有する目は、見るものにキツイ印象を与えそうだが高い鼻の下に配置された少し厚みがある真っ赤な唇が大人の女性の色香を漂わせ、全体的にみると凄く色っぽい。

腰まである茶色の髪はサラサラストレートとは言えない癖毛だが、その癖が柔らかいウェーブを作り女性らしさがより加わっている。もしこれで、体のラインを強調するようなドレスなど着れば妖艶ともいえる彼女に、落ちない男性はいないだろう。

しかし、この性格を・・・リアンを気絶させといて、平気でネズミ男のせいにする性格を考えると溜息が洩れた。

それを聞き咎めたマリアは、訝しげにリアンを見つめる。

「なんですの？今の溜息は？？そんなんですから、幸せも財布も逃げていくのですわ。」

「え？財布は関係ないだろっ！！それに溜息は、マリアのせいだよっ！！」

「わたくしのせいですって！？財布をなくしたのは、リアンですよ！？」

「だーかーらー！！財布は忘れろっって！！」

「何をおっしゃてるの！？お金がなければ生活できないのに、忘れるなんて、あなたって本当におバカですね！」

「違うっ！そういう意味じゃなくて・・・て、何か今、爆発音しなかった？」

リアンが、ふと部屋に一つだけある扉へと目を向ける。
遠くの方で爆発音が聞こえた気がするのだ。

「リアンのせいで、わたしの貴重な睡眠時間が減ってしまいましたわ。」

え？とリアンがマリアの方を向けばマリアは溜息交じりに呟いた。

「きつと冒険者が救出しにきたのですわ。それにしても、なんですかの。」

この芸術的センスがない爆発音。
こんな効率の悪い魔法の使い方、自分の魔力を自慢したいだけで

すわね。

まったく、きつとただのナルシストですわよ。」

「マリア・・・せつかく助けに来てくれたんだし、そこまで言わなくても。」

「本当に熟練された冒険者というものは、無駄に魔法を使ったりしません。」

それにこんなに魔法を使ったら、魔法の衝撃で建物が持ちませんわ。」

「た、たしかにさっきから振動が凄いけど。」

例えそうだとしても、いいすぎだよ。

なんで見ず知らずの人たちにそこまで言つのさ・・・。」

その時、部屋に一つだけある扉の向こう側から凜々しい男性の声がきこえた。

「この部屋が最後か。すいませーん！中にいる皆さん。少し危ないので扉の傍から離れてください。10秒数えたら魔法で扉を壊します。巻き込まれないよう非難してください。」

入口付近で横になっていた女性達が、いそいそと奥の方に避難した。

その様子を見ていたマリアは、ぽつりと呟いた。

「リアン、わたくし思うのですけど扉を爆破させるってどういふことですか。」

「きつと扉に鍵が掛っているから魔法で壊すんじゃないかな？」

「なんですって！？冒険者のくせに、ドアのカギ1つ開ける事もできないんですの！？」

カギ開けなんて猿にもできることですよっ！？」

またヒートアップしてきたマリアにリアンは言った。勇気を振り絞って。

「マ、マリア。落ち着いて。でも扉が開けば逃げられるんだし・・・ね？」

「何を言ってるのよ！リアン！扉が壊れてしまったら、もうこの部屋で寝れないじゃないっ！！」

「・・・え？」

「せっかく野宿じゃなくて屋内で寝れると思ってましたのに・・・。なにも、こんな時間に助けにこなくてもいいものをつっ！！」

「まさか、マリア・・・冒険者に冷たいのって寝るの邪魔されたからだったりする？」

「あら？他に何か理由があるのかしら？」

「・・・」

扉の向こうで男性が10秒数え終わると急に扉がメラメラと燃え上がり、その後、水が火を消した。どうやら火の魔法で扉を燃やし、火が燃え広がらない内に水の魔法で消化したらしい。火が完全に消えると煙の中から現れたのは、スラッとした黒髪黒目の剣士だった。

美形だった。

彼は、手に持っていた剣をしまうと女性好きそうな爽やかな笑顔を顔にのせた。

「みなさん、私は皆さんを助けにきた冒険者の者です。悪者達は先ほど、全滅いたしました。さあ、この部屋から出て町に向かいましょう。」

部屋にいた女性達は疲れていた顔をしていたが、その剣士の登場に頬を赤くしている者もいる。剣士は後ろを向くと、彼の後ろにいた仲間たちに声をかけた。

「おい、シルフィー、アリーン。この人たちを、ここから非難させるぞ。手を貸してくれ。」

呼ばれて入ってきた白髪の冷たい印象の男性と、赤い髪で勝ち気そうな剣士の女性が中にいる人たちを丁寧に外へ連れ出していく。そして、最初に入ってきた剣士は最後に残っていたリアン達の方へ向くと、言った。

「お嬢さん方、あなた達もどうか建物の外へ。ここは、いつ壊れてもおかしくない状態だ。手を貸そう。」

差し出された手を、マリアは両手で包みこむと瞳をうるうるさせて剣士を見つめた。

「わたくし自分がどうなってしまうかと、大変怖い思いをしています。こんな綺麗な殿方に助けて頂けるなんて感激ですわ。どうも、ありがとうございます。」

さっきの怒りはどこへやら。

マリアに見つめられた剣士は、まんざらでもなさそうに笑う。

「これが、われわれ冒険者の仕事でもある。お礼なんて必要ないよ。あなたが無事で何よりだ。」

まあっ感激した風なマリアを連れたって剣士は壊れた扉へと歩いて行く。その様子をリアンは啞然として見ているとマリアが振りかえった。

「まあ、リアン。早くいらっしやい。剣士様のお手を煩わせてはダメよ。」

そして、少し失礼しますわと繋いでいた手を離しリアンの傍へと駆け寄ってくる。

剣士が微笑ましそうに微笑んでいる。その表情から彼はもう、マリアの魔の手に落ちてしまっている事をリアンは核心した。

「さあ、いきましようリアン。」

マリアに促されて歩きだしたリアン。

その背後から、チツという舌打ちとボソボソと一人言が聞こえてくる。

「この部屋から、わたくし達を連れ出してどうするのかしら。

こんな時間に町に戻るうなんて気が狂ってますわ。

まさか野宿なんてことないわよね？」

リアンは、もう何も言わず黙って剣士の後を追った。

3・睡眠は大切（前書き）

どうも、こんばんわ。

今回はギルドに対しての説明です！。

3・睡眠は大切

冒険者の剣士の後について建物の外へ出ると、馬車が5台ほど並んでいた。

馬車の前には冒険者に倒されたのだろっ、ネズミ顔の男とその仲間が縄で手足を拘束され地面に座っており、そのまわりを監視するように5人の冒険者達が囲んでいる。

先ほど後から部屋に入ってきた白い髪と赤い髪の二人組も、その中にいた。

そこから少し離れた場所には、先ほどまで同室にいた女子供が集まっているのが見える。

彼女たちの視線の先にも冒険者が3人程おり何やら話をしているようだ。

リアンは、かぶった灰色のフードの下からその様子を見て大所帯だなーと少々驚いた。

「あらゝ。凄いですわゝ。馬車が5台もある所なんて、わたくし初めて見ましたわ。」

それに、冒険者の方々もあんなに。ランディー様の部下なの？」

タイミングよく自分の横から、思っていたことを代弁するような声が聞こえてきた。

マリアである。どうやら先ほどの剣士はランディーと言っらしい。

二人は恋人同士のように寄り添っていた。いつの間に……。

「ははは。これだけの人たちを救出となると、救出後の移動も大変ですからね。」

冒険者ギルドに掛け合って馬車を用意してもらっただけです。

馬車の護衛などで人手もいるだろうと思ひまして、他の冒険者のパーティに声をかけたのです。」

マリアは、驚いた声を出した。

「まあ！！冒険者ギルドは5台もの馬車を用意できるものなのですか？

お恥ずかしいですが、わたくし冒険者ギルドについてよく知らないのです。」

「ああ、普通は馬車を破壊される恐れもあるので貸し出してくれないでしょうね。

俺のギルドランクがBランクなので、ギルドに融通がきくんですよ。

マリアさんはギルドに詳しくないとおっしゃいましたが、冒険者については知ってますか？」

その問いかけにマリアは首を斜めに傾げて、片側の頬に手のひらを当てて困った顔をした。

「冒険者についてなら少しは。

冒険者というのは、困っている人たちを助けるのをお仕事にしていらっしやる方々で、

困っている人たちは問題を解決してもらつ冒険者を紹介してもらつために冒険者ギルドに

依頼を出すのですわよね？」

ランディーは、うなずくとマリアに言った。

「その通りです。」

冒険者ギルドは依頼を受けると、その依頼の難易度にランクを付けるのです。

薬草探しなど命を失う危険性がないものは、一番下のGランク。そこから順に

F、E、D、C、B、A、Sの順に難易度が高くなりますね。」

そこで一度区切ると、ランディーはマリアに向けてニコリとほほ笑む。

「あと、依頼と同じ様なランク分けを冒険者にもしているのです。

駆け出しの冒険者はGランク。彼らはGランクの依頼しか受けることができません。

そこから幾つかの依頼を達成すると冒険者のランクがあがってきます。

今回の救出任務のような自分の命の他に一般人の方々の命が掛っている任務はBランクとなり

Bランクの冒険者が救出にくるのです。」

パンつとマリアが両手を打ちならし、感嘆の声があげた。

「まあー！！それじゃあ、ランディー様は凄くお強いのではなくて？

こんなにハンサムで強いなんて女性の理想の男性ですね。うふふ」

ランディーは照れくさそうに鼻の頭をかいて言った。

「まあ、そんな凄いものじゃないんですけどね。

一応Bランクになると今まで任務をこなしてきた信頼性があるのでギルドにも

ちょっとわがままを言えるんですよ。だから馬車も用意してもらえ

るんです。」

「なるほど、そうでしたのね。これだけの馬車を一度に用意するのも大変なのにつて

思っておりましたがランディー様の信頼が厚いためでしたの。

お話を聞いている限り、Bランクといったらかなりお強いのでしょうか？

わたくし身体も余り強い方じゃないので、ランディー様がいてくだされば心強いですわ。」

これまで二人の会話に耳を傾けていたリアンは、マリアの甘えるような声色に、よく言うよと、突っ込みたくなった。

「まあ、冒険者ランクがBランクになるのは結構大変ですね。

魔法を使用する動物で魔物って分かりますよね？

それを倒す依頼がCランクでよくあるんですが、なかなか強くて倒せない者が多いんです。

なのでBランクに昇格できる冒険者の数は少ないですね。

まあ、Aランクは数えるくらいしかないしSランクの冒険者なんているかいけないか

分らないので、ギルド内でよく見かける中ではBランクが1番上だったりするんです。」

はははつと爽やかにマリアに笑いかけるランディー。

マリアに凄いですわと褒められるのを満更でもなさそうに、会話をしている。

そんなときだった。

軽やかに走ってくる足音をリアンの耳が拾った。

足音の方に目を向けると、女性たちが集まっていた方向から、まだ

幼さを残した青年がこちらに走ってくる。

短髪の青い紙に黄色のバンダナを巻いて活発そうな青年である。

「おい。ランディーの兄ちゃん！」

彼は笑顔でランディーに呼びかけた。褐色の肌と笑った口元から覗く八重歯が特徴的である。

「どうした？ドル？」

ドルと呼ばれた青い髪の少年は大きな青い目をキラキラさせてランディーの横に並ぶと、自慢げに胸を張る。その様子は、褒めて褒めてと全身で訴える子犬のようだ。

「僕たちの方は、救出した人達にこれからの予定について話おわったよん！」

とりあえず、一通りの説明も終わったから、いつ頃出発するか兄ちゃんに聞きにきたんだ！

救出した人達も外にいるの不安だろうし、早く馬車に乗せてあげたいからねっ」

先ほど何やら説明していたのは、今後の予定についてだったのか・

・
リアンが一人で納得しているとマリアが近付いてきた。

「リアン、リアン、今後の予定について、あなた何か聞きました？」

「いや、僕は何も聞いてないけど……って、なんでそんな呆れた目を向けられないといけないの？」

言ってリアンはマリアを見上げた。マリアの頭はリアンよりの頭より半分ほど高い位置にある。

「だってリアン、あなた今まで何をボケっとしてましたの？まさかここに、ぼーっと突っ立ってた訳じゃありませんのよね？」

「いや、別にぼーっとはしていないけどさ。」

マリアから向けられていた視線は、本当に？と疑わしそうなものに変った。

「う……。そんなこと言ったらマリアだってランディーさんだっけ？」

彼とラブラブしてただけじゃないっ！！
だいたい、ギルドについて今更聞くことでもないだろうっ！！」

「しっ！声が大きいですわ、リアン！」

リアンの口を急いで手で押さえたマリアはランディー達がいる方向とは反対の方をむき、こそこそと言う。

「リアン、あなた声が大きいですわよ。」

リアンの声も自然と小さくなる。

「聞かれて不味いことしなきゃいいだろ。
だいたいギルドについて聞かなくても知ってるじゃないか。」

「はぁ……。リアンは昔から先のことを少しも考えていませんのね。何のために、わたくしが

あんなへっぽこ剣士の自慢話を黙って聞いていたと思ってますの
?」

「・・・なんでだろう。可愛く見られたいから・・・とか?
というか、へっぽこってなんだよ。助けてくれた人にむかって。

「まったく。いいですわ。教えて差し上げます。

まず、あちらに止まっている馬車をみてちょうだい。」

言ってマリアは5台ほど並んでいる馬車を指差した。

「いいですこと?ここにゐる馬車は5台。それに対して、救出され
た人数は30人ほど。

馬車の1台は人売り達の護送用とかんがえて、残りの馬車は4台。
まあ、1台に7人ゝ8人程が乗ることになりますわね。」

「たしかに・・・。そうなりそうだね。」

「そうでしょう?でも、あの馬車の大きさは6人乗りですわ。」

たしかに用意された馬車は寄合い馬車などで用いられる15人乗り
などの大きなものではなかった。

「たしかに6人乗りだけど、体の小さな子供もいるし1台に7、8
人乗れるんじゃない?

丁度いいと思うけど・・・。」

「・・・丁度いいですって?」

マリアの目が鋭くなる。

「リアン、何おバカなこといつてるの!!」

「……え?」

「そんなにギュウギュウにつめられたら横になることなんてできないじゃないっ。」

リアンの顔にマリアは顔を一層近づけた。

「わたくしは、夜はゆっくり眠りたいんですの。そのためだったら何でもしますわっ!」

マリアはリアンのそばから離れるとランディーの方へ、すすすつと近寄っていく。

その様子を啞然と見ているリアンに、マリアの甘えた声が聞こえてきた。

「ランディー様あゝ。そちらの方も冒険者なのですか?」

「ああ、マリアさん。彼は今回の救出に協力してくれたんだよ。ドル、こちらはマリアさん。」

紹介されたドルは、マリアにニパツと八重歯を出して笑いかけた。

「ども。僕、冒険者ランクDのドルっていいいます。お姉ちゃん、よろしくね!」

「あら、ご丁寧にありがとうございます。今回は、わたくし達を助けてく

ださりありがとう。

すごく心細かったので、大変感謝しておりますわ。」

「全然、気にすることないよっ！これが僕たちのお仕事だもんっ！」

にこにこ笑顔のドルの前で、あっ！そういえばとマリアは、リアンに手まねきをした。

「リアン、こっちにいらっしやい。」

呼ばれたリアンは、マリアの方に近づいていく。

「ランディー様、ドル様、こちらは、わたくしの連れでリアンと申しますの。」

リアン、お二人に感謝のお礼とご挨拶を。」

言われたリアンは、今までかぶっていた灰色のフードを外し軽く会釈した。

「えーと、ランディーさんとドルくんでもいいのかな？」

僕はリアン。今回は助けられてありがとうございます。」

ランディーは、フードを外して現れたリアンの顔に視線をやった。現れたのは目元も隠れる滝のようなみだれ髪に、透き通るような白い肌であった。

華奢な容姿と毛先が遊ぶ細い顎のラインから見るに、まだ少年というほどの年齢だろう。

なんとなくだが、髪色と雰囲気のマリアに似ている。兄弟だろうか。

「よろしくリアン。俺はランディオールだ。みんなランディーって

呼ぶし

ランディーで構わないよ。それでこっちの、ちっこい小犬みたいなのがドルだ。」

ちっこい小犬と称されたドルは、ぷくうつと頬を膨らませた。

「なんだよ子犬って！！僕は人間だぞー！！しかも、リアンのがちっこいじゃないかっ！

もうっ！兄ちゃんは、いつもそうやって僕を子供扱いするんだからっ！！」

まあまあ、おちつけとランディーに言われ、不本意そうにリアンへとドルは顔を向けた。

「まあ、兄ちゃんはこう言ってるけど、ちゃんとギルドにも所属しててDランクを持ってる

からねっ！リアン、道中は僕が守ってあげるから安心してねっ！」

そういつてえへつと笑ったドルに、リアンもよろしくといって返した。

どうやらこれから、馬車にのって移動するらしい。

何事もなければいいのだが・・・そう思っていたリアンは、マリアを視線を向けて考えを改めた。

マリアがいる限り、何もないなんてありえない。彼女自体が火種、いや爆弾であろうことを今までの経験上否応なく学んだのだから。

4・睡眠は大切（前書き）

。こんにちは。マリアのワガママのせいで全然話がすすみません・・・

4・睡眠は大切

ガタゴトガタゴト馬車が夜道を走っていると外から獰猛そうな獣の鳴き声が聞こえてきた。

馬車の中にある3人掛け用の椅子の上に横になっていたマリアは、その鳴き声を聞いて起き上がった。

「なんか、嫌な獣の鳴き声ねえ。馬車が襲われたりしないか心配ですわ。」

椅子の下で膝を抱え小さくなっていたリアンは、伸ばし放題の前髪の間からマリアを覗きこむようにして見上げる。

「・・・大丈夫なんじゃない？ランディやドルの仲間もいるし。」

そんなに心配なら僕が馬車の外を見張ろうか？」

「別に心配はしていませんわ。ちょっと試ってみただけですもの。」

そう？とリアンは首を傾げる。

「でもまあ、結局マリアのワガママは通っちゃうし、僕は僕らの行く末のが心配だよ。」

「あら？わたくしワガママなんて言いまして？」

ランディー達とリアンの挨拶が終わった後、マリアは自分の身体が弱いのだのなんだのといって馬車を1台占領していた。占領といっても人数の都合上さすがにマリア一人とはいかない。マリアが横になるのに十分なスペースを確保するために馬車の中は、リアンとマリア以外が全て子供だった。

「本当は分かっているくせに。マリアはいいけど他の人に申し訳ないよ。」

そのうち敵意を向けられるようになっちゃうよ?」

そう言うとりアンは馬車の中を見まわした。

椅子の下には子供が3人、マリアと反対側の椅子の上に5人が座っていた。

「何を言ってるんですの？」

もともとリアンが財布さえなくさなければこんなことになっていないのですわよ。」

「う……。。」

何も言えなくなるリアンにマリアは興味なさげに窓の方を見て言う。

「まあ、いいですわ。それにしても、なんだか獣の鳴き声が近くなくていませんか?」

リアンは立ち上がると馬車にある2つの窓の1つから外の様子を見た。

耳を澄ますと、確かにさつきよりも近くなっている気がする。しかも数も多いような……。。

どうやら馬車は森の中の道を進んでるようであり、窓からでは木々が立ち並んでいる様子しか見えない。森の奥の方は、馬車からの明かりも届かず暗闇が不気味だ。

「ここからだと言った姿は見えないな。でも確かに近くから鳴き声が聞こえる。」

「まあ、いいですね。獣の10匹や100匹ならランディー達はどうにかするでしょう。」

むしろ襲われる危険性がある場所を選んで走ってるのだから、どうにかして頂けないと唯のバカですわね。」

「・・・だから助けてもらっておいで馬鹿とか言わないの。」

リアンは窓を閉めると元の場所に座った。馬車にある椅子を占領しているマリアは、身体を横たえながら言う。

「とりあえず、わたくしは眠いので寝ますわね。何かあっても起きないで頂戴。」

ああ、そういえばリアン。荷物の中から毛布を取ってくださらない？」

え？マリアの荷物の中に毛布なんて入ってたっけ？

疑問に思いながらも荷物の中を漁ると、確かに毛布が入っていた。これって人売りのアジトにあったやつじゃないの？盗んだのか？

ガウッ！！ガウッ！！ガウッ！！ガルルウ！！！！

突然、獣の鳴き声がすぐ傍で聞こえた。次の瞬間には、急に馬車がとまり馬車の入り口が勢いよく開く。あまりの勢いに驚いて目をむけると、ドタバタとドルが馬車に入ってきて慌てて扉を閉めた。

「・・・一体どうしたんですの？」

マリアが声をかけると、そわそわと落ち着きがないドルが振り返った。顔は笑顔だったが若干ひきつっているようにも見える。

「みんな、少しの間だけ馬車の中で静かにしてほしいんだ。」

それを聞いて馬車の中の子供たちが不安そうにドルを見上げた。マリアは体を起こして気だるそうに前髪をかき上げて言う。

「ドル、そんなに慌てて何があったんですの？」

「いや、大したことじゃないんだ。」

大したことがないと言ってる割には、落ち着きがない。その様子にマリアも気づいたようだ。

「大したことじゃない割には、随分と慌ててませんこと？」

「大丈夫だって！本当に大したことじゃないんだ。すぐに、また出発するから。」

そういうとドルは、扉に耳をつけた。どうやら外の音を拾おうとしているようだ。

リアンはその様子をみて、そんなことしなくても獣の音がさつきから煩いけど・・・と思っていたのだが。

「ねえねえ、ドル。そんなことしなくても外の音なら聞こえるけど・・・。」

さつきから獣の音がするし、もしかして馬車が獣に襲われてる？」

ドルがゆっくりとドアから耳を話して振りむいた。そして追い打ち

を掛けるマリア。

「というか、確かに、疑いもなく、襲撃されてますわね。
わたくし、なぜドルがそれを隠そうとしてるかのが理解不能です
わ。」

言われたドルは、大きな目を何度も瞬きしてマリアを穴があくかというほど見つめた。

「え？え？僕が隠した意味なかった？」

「ええ。まったくもって先ほどから獣の声が聞こえますわ。ねえ、
リアン？」

「え？あ、うん。そうだね。もしかしてランディーさんとか闘ってるの？」

外から獣の声に混じって、人の声らしきものも聞こえてくる。

「実は、そうなんだ。今、外は危険なんだよね。
でもランディーの兄ちゃんたち強いから兄ちゃん達に任せれば大丈夫だよ！」

そう言っでドルは、固い笑みを浮かべた。

リアンは、そんなドルをみて襲撃されて緊張しているのかな・・・
と思った。

しかし、よくよく考えてみればドルは危険な仕事も請け負う冒険者
ギルドに所属している。それに、ドルのギルドランクはDランクだとドル自信が言っていた。Dランクと言えば、普通の獣なら然程苦

劣せずに倒せるレベルである。だがドルは戦わずに馬車の中に入ってきた。

その事実にはリアンは、ハツとなった。馬車を襲っているのは、ただの獣ではないっ。

慌てて腰を上げようとしたが背後から聞こえたマリアの声に踏みとどまる。

「まあ、ドルが大丈夫と言うのですし大丈夫なのでしょう。わたくし眠いので寝させて頂きますわ。」

そのまま横になって目をつぶるマリア。

ちよ、ちよっと、ちよっと！？馬車が襲われている中、寝るって・・。

リアンは我が相棒ながら、予想外の行動に啞然としてしまった。

ドルも、さすがに寝てていいよとは言えないのだろう。え？え？とドルの方から声が聞こえてくる。

リアンは、相棒である僕がマリアと話した方がいいだろうなと思いいドルに言った。

「ドル、馬車の中の子供たちが不安そうだから相手してあげてくれない？」

さすがに、この状況の中で眠るのは不測の事態が起きた時に大変だから、マリアに寝ないよう説得するから。」

ドルも今の危険な状況を思い出したのだろう。リアンがマリアを説得してくれるなら、肯定の返事をし怯えた表情をする子供達の方へ寄っていく。

それをリアンは確認するとマリアの耳元に座り小さな声で呼びかけ

る。

「マリア、まだ寝てないんだろ？」

うつとうしそくにマリアは薄く目を開けた。

「なんですの？」

反応があつた事を確認するとリアンは話の内容が子供達に聞こえないように顔をマリアの耳に近付ける。

「たぶん、魔獣に襲われてる。」

マリアは器用に片方の眉だけをあげ、続きを促した。

「鳴き声の数からして結構な数いると思うから、ランディーさん達だけだとキツイかもしれない。僕も外に行こうと思うからマリアは中で子供たちの様子を見てて」

そう言い立ち上がろうとするリアンの腕をマリアは掴んで引き留めた。

「お待ちなさい。ランディー達が解決するというのだから大人しく馬車の中にいればいいのですわ。」

引き留められたリアンは乱れた髪の間から覗きこむようにマリアをみた。

その瞳は、薄い水色のせいかランプがあたると湖面に光が反射するような神秘さがあつた。

「でも僕は誰かが戦っている時に自分だけ、のんびりしてるなんてできないよ。」

馬車の中はマリアに頼んだから。寝ちゃだめだよ。」

そのリアンの言葉にマリアは、溜息をひとつつく。マリアの相棒であるリアンは、普段気が弱いように見えるが一度こうと決めると頑固なのだ。しょうがないですね、とマリアは呟いた。

それを了承の合図だと思ったリアンは、よろしくねつと言いだアに向かう。しかしドアに手が届く事はなかった。

「リアン、どこへ行くつもりですか？外は危険ですよ！！」

それは馬車の外にも聞こえるのではないかという大きな声だった。発生源はマリアである。どこへ行くつもりでさっき説明したじゃないかと、訝しげにリアンがマリアを振り向くと馬車の中の別の方から声が掛った。ドルだ。

「え？どうしたの？なんかあった？」

子供達に囲まれたドルにマリアは今にも泣きそうな表情を浮かべて言う。

「それがリアンが、ランディー達が心配だからって外へ行こうとしてるんですの。リアンなんか行っても獣の餌にされてしまいますわ。」

餌という言葉に子供達がビクツと反応した。どうやら自分が喰われる所を想像したらしい。今にも泣きだしそうな子供の頭をよしよしと撫でながらドルが言う。

「ちよつと、姉ちゃん！ちつちやい子を怖がらせるようなこと言わないで！」

それにリアン！外は危ないから兄ちゃん達に任せとけばいいの！そんな所につつ立ってないで元の位置に座って座って！」

それに便乗するマリア。

「そうですね、ランディー達に任せとけばいいのです。わたくし、あなたが怪我でもしたらと考えたら・・・ううう」

そう言つてマリアは毛布に顔を埋めて、泣き声を上げる。どこからどうみてもリアンには嘘泣きにしかみえない。だがドルは子供達から、ちよいとゴメンよつと言つて離れるとマリアに近づいて今度はマリアの頭をよしよしと撫で始めた。

「姉ちゃん泣かないでよ！リアンは外に行ったりしないから！ね？リアン行かないよね？それに、リアンが行くと馬車の中の子供達も心配して不安になるし。」

ランディー兄ちゃん達は強いし大丈夫だから！とドルに何度も言われ、リアン行かないでと嘘泣きのマリアに泣きつかれ、結局リアンは元の位置に戻るしかなくなつてしまつた。しかし元の場所に座つても馬車の外から獣の声が聞こえてくる度に落ち着かない。そわそわとしているリアンにマリアが小声で囁く。

「リアンは、ここに座つて馬車の中の様子を見ていればいいのですわ。そして私の睡眠を邪魔するものがいたら追い払つて下さればいいの。それじゃあ、わたくしは寝ますわね。まったく寝るのが遅くなつてしまつたわ。」

それを聞いたリアンは、愕然とした。

僕を止めたのは心配してくれたからじゃないんだね……。マリアの睡眠を守るためなんだね……。

「いいですか？ 決して、何があっても、起こさないでちょうだい。おやすみなさい。」

この言葉を最後にマリアから規則正しい寝息が聞こえ始めた。

泣きたいのはこっちだよ。リアンは、ぼそつと呟いたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6684p/>

泡沫の王女

2011年10月7日20時03分発行